

ショートコメント vol.108 (2018年6月12日)

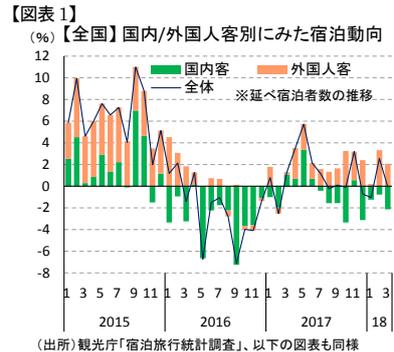
テーマ：ホテルの宿泊需要に忍び寄る不安

～不安定な国内需要。高まるインバウンドへの依存～

●直近の宿泊者数の推移

近年、ホテルや旅館の宿泊需要は、堅調に推移しているとの見方が一般的である。特に、インバウンドの増加が追い風となっており、都市部を中心に好調な動きがみられる。

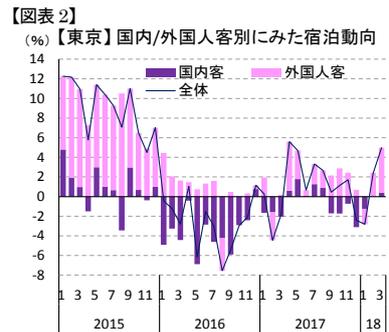
宿泊需要が堅調に推移していること自体は明るいニュースであるが、国内客とインバウンドに分けると、やや懸念すべき動きがみられる。というのも、全国的には国内客による延べ宿泊者数が前年を下回って推移している(図表1)。前年を下回る動きは2016年ごろから断続的に続いているが、そもそも消費全体が鈍い状況であるため、旅行などもその影響を受けざるを得ない。つまり、現状は決して宿泊需要全体が好調というわけではないのである。



●好調なインバウンドの裏側で、不調が続く国内客

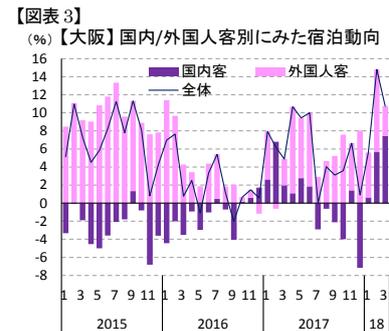
直近の状況を言い換えれば、インバウンドの好調が国内客の鈍さを覆い隠す形となっている。仮にここでインバウンドの需要が悪化すれば、一気に宿泊者数全体がマイナスに転じることもあり得る。その時点で、国内需要の鈍さが改めて露呈することになる。

インバウンド市場自体は、2018年に入っても好調に推移していることから、現時点で大きな懸念はないものの、そのリスクについては注意が必要といえよう。

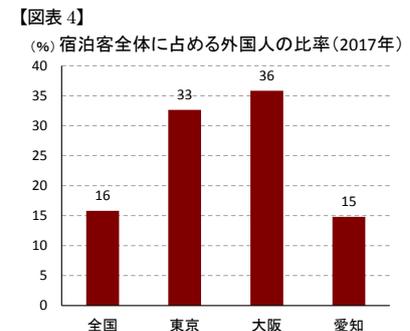


●都市部では国内客も堅調な推移

一方、東京や大阪といった都市部については、少し状況が異なる。足元も国内客による需要には一定の増加がみられるなど、決して悪くはない(図表2、3)。かといって、今後の推移を楽観視することもできない。需要に占めるインバウンドの割合の高さを考えると、インバウンドが前年割れとなった際のインパクトはその分だけ大きくなるからである。



2017年の平均でいえば、東京の宿泊客全体に占めるインバウンドの比率は33%、大阪は36%と、全国の16%を大きく上回る(図表4)。足元では国内客が増えているとはいえ、増勢はそこまで強くない。インバウンドが減少に転じれば、全体への影響も避けられない状況といえよう。



本件照会先:大阪本社 荒木秀之
 TEL:06(4705)3635 mail:hd-araki@rri.co.jp

※本稿は情報提供が目的であり、商品取引を勧誘するものではありません。また、本稿は当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成しておりますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。なお、本稿に記載された内容は執筆時点のものであり、今後予告なしに変更されることがあります。